（第３種郵便物認可）

土壌分析

肥料代を大幅節減

土の会で事例報告 収量・品質向上も

土壌分析をして施肥を見直したところ、肥料代が大幅に減少、さらに野菜の収量や品質が向上した、という事例が、熊本市で9日に開かれた「第28回全国土の会九州大会」で相次いで報告された。全国土の会などの主催。会員の農家が適切な施肥に転換した事例を報告。中には85％も肥料代が安くなった例もあった。さらに病害が激減した例も紹介された。

熊本県八代市のイチゴ農家、池田敏郎さん（40）は、同会とＪＡやつしろの土壌分析を活用し、元肥を無肥料にし追肥もリン酸成分をゼロにした。その結果10アール約４万円だった肥料代は、85％減の約６０００円に減った。肥料のコストが減らせただけでなく、「収量も15～20％増収した」と話した。

北海道富良野市の野菜農家でＪＡふらのほうれん草部会長の奥野裕史さん（44）は同ＪＡの土壌診断などを活用。リン酸過剰を解決するために、ホウレンソウは元肥を尿素にし、10アール当たり肥料代は79％減の１５８０円になった。タマネギも31％減の９６００円、ニンジンは27％減の８０５０円になった。さらにタマネギはリン酸を減らすことで、乾腐病が激減した。収量も、タマネギは10アール６トン弱、ニンジンは５トン以上に増えた。「ニンジンは根腐りが抑えられ品質も良くなった」と述べた。

宮崎市で施設キュウリを栽培する細川洋一郎さん（39）は、養液土耕で液肥を単肥に変更したところ収量が増えた。夏にも強くなったことから周年栽培の可能性を探っているという。元肥代は10アール当たり約８万７０００円を77％減の約２万円にまで切り下げられた。

静岡県磐田市のＪＡ遠州中央ときめき野菜委員会委員長、角田茂巳さん（63）は、ＪＡの土壌分析を利用、チンゲンサイでは年６作分で13万円近くかけていた肥料代が28％減の約９万３０００円になった。現在試験している生ごみ肥料を使えばさらに半減できると見通した。

同会の後藤逸男会長は、肥料価格が安いとされる韓国の情勢も紹介。安価とされるのはリン酸が多い配合肥料で、韓国の土壌ではリン酸過剰から病害の多発を招いていると、問題点を指摘した。

国内の調査から、最近の土壌の傾向も分析。園芸土壌のリン酸過剰、それに伴う土壌病害多発、施設土壌の高ＥＣ（電気伝導度）化、かんきつと茶園の酸性化、水田の地力低下を指摘した。